



TITLE:

<書評>中谷文美・宇田川妙子編『
仕事の人類学 -- 労働中心主義の向
こうへ』世界思想社、2016年、
4,000円＋税、307頁

AUTHOR(S):

藤倉, 康子

CITATION:

藤倉, 康子. <書評>中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学 -- 労働中心主義の向こうへ』
世界思想社、2016年、4,000円＋税、307頁. コンタクト・ゾーン 2017, 9(2017): 446-452

ISSUE DATE:

2017-12-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228340>

RIGHT:

中谷文美・宇田川妙子編

『仕事の人類学 ——労働中心主義の向こうへ』

世界思想社、2016年、4,000円＋税、307頁

藤倉康子

本書は、そもそも労働・仕事とは何なのかという問題に対して、経済的報酬の有無にもとづく従来の労働中心の仕事観を相対化し、人々の生活世界に根ざした生き方としての仕事観を考察した論文集である。序章に続き、3部で構成された10本の論文と5点のNoteから全体が構成されていて、「仕事」「労働」「働くこと」の意味と実践を再考することにより、仕事研究に新たな議論の地平を示すことがめざされている。本書におさめられた各章の事例では、世界のさまざまな地域に暮らす人々の生活世界を対象に、当事者の経験や視点をすくいあげる人類学的方法により、仕事概念からはこぼれ落ちがちな諸活動が人々の生活や社会全体にとって持つ意味を理解しようとしている。また、ジェンダーの視点からは、性別分業をめぐる問題が再考される。家事や育児に代表されるような家庭内での無償労働を女性たちが中心になって担うとき、それは無償であったとしても、当事者にとっての仕事にはちがいない、という従来のフェミニズムの議論に加えて、男性たちの仕事にも目が向けられ、「稼ぎ手」としての役割だけでなく、父や兄、息子としての生き方、地域社会における役割など、男性たちの生活全般の中から彼らの仕事を見直すことの重要性も指摘されている。

本書の構成は以下の通りである。

序 章 仕事への人類学的アプローチ（中谷文美・宇田川妙子）

I 性別分業の揺らぎに向き合う

第1章 「見えない」仕事、「見せない」仕事

——ウズベキスタンの刺繍業における男性性（今堀恵美）

第2章 揺れる「男の仕事」「女の仕事」

——ポスト社会主義期ブルガリアの農村女性たちの経験から（松前もゆる）

第3章 グローバル化における家族とジェンダー役割の再配置

——日本人女性とパキスタン人男性の越境結婚の事例から（工藤正子）

第4章 女が「稼ぐ」ということ

——東北タイ農村女性の出稼ぎとライフコースの変容（木曾恵子）

Note 1 妻たちの起業——インドネシア女性の知恵と戦略（阿良田麻里子）

Note 2 北アフリカにおける女性の就労行動の変化とジェンダー役割（宮治美江子）

II <労働>概念の外延を広げる

第5章 儀礼は仕事か？——バリ人にとっての働くことと休むこと（中谷文美）

第6章 それぞれの「生きていくためのやり方」

——現代のカラハリ狩猟採集社会において働くということ（丸山淳子）

第7章 「仕事は仕事」

——東アフリカ諸国におけるインフォーマル経済のダイナミズム（小川さやか）

第8章 労働に埋め込まれた社会関係、社会関係に埋め込まれた労働

——「仕事嫌い」なイタリア人の働き方（宇田川妙子）

Note 3 「仕事」と「労働」——東マレーシアで kerja という言葉から考える（石川登）

Note 4 「物乞い」という仕事——インドネシアそして日本（嶋田ミカ）

Note 5 ワーク・ライフ・バランスを要請する北欧福祉社会の課題（鈴木七美）

III 労働とジェンダーの軌跡をたどる

第9章 女性たちはどこでどのように働いてきたのか

——女性労働研究の課題と方法を再考する（木本喜美子）

第10章 戦後日本における「仕事」の意味と男性性（ジェームス・ロバーソン）

中谷文美と宇田川妙子による序章では、まず、仕事・労働概念の根本的な再検討の必要性が論じられている。現代社会において「仕事」とは「稼ぐこと」に直結する活動として理解されることが多いが、日常語としての「仕事」は、収入に結びつかない場合でも「しなくてはならないこと」を意味することがある。また、仕事の定義は社会によって異なっており、「働く」「遊ぶ」「休む」といった活動が一体化していたり、連続していたりする特徴が見られる社会も多々ある。「仕事」とは何か、「仕事でないもの」とは何か、その境界を定める要因は何であるかといった問題には、より総合的な社会的価値が大きくかわっており、仕事と社会的価値の関連性は時代の移り変わりの中で変化する。このように、仕事や労働という言葉によって示される活動の多義性、連続性をふまえた上で、中谷と宇田川は、仕事・労働概念の歴史的側面を指摘する。多くの社会において、日常生活における老若男女による多種多様の営みが、それぞれ「仕事」としての価値を持ちつつ一体として生活世界を構成していた状況が失われ、賃金労働だけが特権的に価値ある仕事とみなされるようになった過程がある。序章では、このように賃金労働が過剰評価されるようになった現代社会の仕事観を相対化し、仕事とは何かという問いをあらためて投げかける土壌を用意しようという本書のねらいが提示される。

パートIの「性別分業の揺らぎに向き合う」は、性別分業の変化と、その性別分業を規定するジェンダー秩序、そして当事者による役割遂行のあり方に焦点を当てている。今堀恵美は、第1章「「見えない」仕事、「見せない」仕事」において、ソヴィエト連邦から独

立した後のウズベキスタンの刺繍業の事例を取り上げる。もともと「女性の仕事」の範疇にありながら産業として高成長を遂げた刺繍業において、夫たちは妻の補佐役として実質的な貢献を果たすようになったが、男性が意図的に自らの関与を誇示せず、女性もあえて家事・育児との二重役割を引き受けている状況があるという。ある活動を「仕事」とみなすか否かという問題は、単に「収入の有無」だけではなく、稼得役割を男性性に、家内役割を女性性に結びつける性別分業の規範と深い関係があるが、今堀は、女性労働論で用いられてきた「見えない仕事」という概念を発展させ、男性の仕事の中にも見えやすい仕事と見えにくい仕事があると指摘する。性別役割分業で「女の仕事」に割り当てられた活動に携わる男性たちは、あえてその仕事を「見せない」態度をとり、妻も稼得役割と強固に結ぶつけられる夫の男性性をそこなわないよう気づかう。この「夫の貢献の不可視化」により、既存の性別分業規範を表面的に受け入れながら、現実には夫婦協業により刺繍業でも高い利潤を上げることが可能になっているという。

第2章の松前もゆる「揺れる「男の仕事」「女の仕事」」は、ポスト社会主義期ブルガリアの農村女性たちの就労とその評価について考察している。体制転換後の不安定な社会状況の中で、農村から女性たちが国境を越えて出稼ぎに行くという新しい現象は、「働くこと」をめぐる従来のジェンダー規範を揺るがしかねず、人々を当惑させているが、女性たち自身は、それが母親としての選択であることを強調する。子どもの教育費や次世代の結婚、家族形成を支える国境を越えた出稼ぎが、結果として、妻や母としての役割の再生産につながってもいるが、松前は、「仕事」は経済行為としての側面ももちろん持つが、同時に、働く人の「男」または「女」としての地位、父や夫、母や妻あるいは嫁としての立場を確保し、よりよくしようとする社会的営みでもあると論じる。

工藤正子による第3章「グローバル化における家族とジェンダー役割の再配置」は、来日したパキスタン人男性と日本人女性の結婚によって形成された家族の事例を取り上げ、収入獲得活動とケアという家族の維持に欠かせない二つの活動が、国境を越えた役割の分業・連鎖によって、どのような交渉を経て引き受けられていくかという問題を検討している。こうした、国境を越えて分散しつつも相互に依存しあう家族・親族ネットワークによって形成される合同家族の場合、ジェンダーだけでなく、国家、宗教をめぐる問題が複雑に作用し、日常の養育や介護だけでなく、次世代への文化継承・教育という側面が重視され、それが男女それぞれの就労選択にも大きな影響を及ぼしている。工藤は、こうした家族のかたちを背景とした若年男性の出稼ぎが、個としての達成をめざすものでありながら、同時に、合同家族や親族ネットワークを支える集合的プロジェクトでもあり、日本からの送金は、合同家族での「よき息子」「頼れる兄」としての地位を、国境を越えて確立し、男性が稼ぎ女性が家内領域を分担するという性別規範を維持・強化することにもつながっていると考察する。

第4章「女が「稼ぐ」ということ」において木曾恵子は、東北タイ農村女性の都市部への出稼ぎとライフコースの変容を考察している。タイ国内で展開される女性の労働移動に関する既存研究の多くが、労働者として働く一時期を対象としていたのに対し、木曾は、数世代にわたる女性たちの就労とライフコースの変化を、家族との関係性の中に位置づけ

ている。娘時代に「稼ぎ手」になるということを経験した女性たちが、結婚や出産後ふたたび出稼ぎに行くという選択をしているが、村で母親業を分担して行う複数の女性の存在があるからこそ、こうした選択が可能になっている。また出稼ぎの目的も、子のための教育資金獲得という側面が強調され、女性のケア役割・母役割の延長とみることもできるという。

パートⅡの「＜労働＞概念の外延を広げる」では、仕事や労働が、経済活動としてだけでなく、さまざまな社会的価値の実現としても行われていることが、多様な事例を通して検証されている。中谷文美による第5章「儀礼は仕事か？」は、インドネシア・バリ島の農村から都市への移住と労働、そして一見労働とは無関係な儀礼の遂行が、どのようなバランスで人々の生活に組み込まれているかを考察している。農村では、神々や祖霊に供物を捧げ人生儀礼を手伝うなどの儀礼的な行為が、日常の労働との連続性の上に行われている。そのため、都市に移住した農村出身者は、収入を稼ぐための就労と、儀礼に参加するための出身村への頻繁な帰省を両立させるため、時間の自由度を最も重視して職業選択を行う。中谷は、生計を維持するための労働は、それ以外の要素とのかかわりにおいてとらえるべきであり、働くことと、休むこと／遊ぶことは、必ずしも二項対立的な関係にはないと指摘する。儀礼は収入には結びつかないが、欠くべからざる営みとしての仕事ととらえられ、同時に楽しみの源泉でもある。生きることの一部に、儀礼という活動が大きな比重を占める現実があり、いかに働くかという問題がいかに生きるかという問題でもある、ということが示されている。

第6章「それぞれの「生きていくためのやり方」」において丸山淳子は、カラハリ砂漠の定住化した狩猟採集民が、急激に変化していく社会状況の中で、生きていくためのさまざまな活動や生活拠点を組み合わせていく過程を検証し、その根底にある仕事に関する価値観を考察する。「主流社会への統合」を目標に掲げた政府の介入による「賃金を得るための活動」の導入と普及により、狩猟採集を中心とする生活から賃金労働を前提とする再定住地での生活への変化を経験した人々は、現金収入を主目的としないような、さまざまな活動にも時間を割き、生きていくために必要な「生活の糧」を得るため、二つの生活拠点を頻繁に往還するようになった。こうしたさまざまな活動を時期や状況に応じて組み合わせる働き方は、気候が安定せず雇用も不定期にしか得られない社会状況下では、リスク分散にもなるが、丸山は、そうした働き方の選択の背景には、各人が自律的に仕事の内容や働き方を決定することを評価し、そして「他者に分かち合うための何か」を獲得することを重視する、定住前から維持されている価値観があると論じる。自然環境と社会状況の不確実性の中で、人々が多様な仕事に従事し、それらのあいだを頻繁に移ることで、誰もが、どの仕事をも独占し続けることなく、またどの仕事にも参入しやすい状況が生まれているという。

第7章の小川さやかによる「「仕事は仕事」」は、タンザニア都市部の零細商人の生活戦略を事例にとり、不確実性を資源とすることで活性化するインフォーマル経済のメカニズムを背景に、人々がいかに仕事を模索・創出しているのかを考察している。零細で不安定ではあるが、人々は、その時々獲得可能な資源や蓄積された経験、そして偶然訪れる好

機との組み合わせによって、一つの仕事で失敗しても別の何かで食いつなぐ、あるいは世帯内の誰かが失敗しても別の誰かの稼ぎで食いつなぐという、「前へ前への生き方」で進んでいく。そうした戦略を支えているのは、偶発的な出会いを積み重ねながら作られていく社会的ネットワークと「運」であるが、小川は、むしろ、ままならない他人や状況にゆだねるからこそ得られる喜びや苦しみがあり、インフォーマル経済がいかにグローバルに展開しようと、その基盤となっているのは日々の生活や人間関係であり、生き方としての仕事観であると論じている。

第8章「労働に埋め込まれた社会関係、社会関係に埋め込まれた労働」において宇田川妙子は、イタリアの雇用労働者たちの実際の働き方を生活全体の中で見直してみるという作業を行っている。雇用労働が主流であるイタリアで、男性労働者たちは、経済的な必要以上に、社交性や自律性を発揮する場として、小遣い稼ぎや副業にいそしもうとする。こうした小遣い稼ぎは、労働そのものというよりも、社会関係の一部として行われており、雇用労働が、自営などを含む多様な労働形態との連続性の上に成り立っていることを示している。宇田川は、労働と社会関係との密接な関連を指摘し、労働が人々の社会関係から生まれているだけでなく、労働もまた社会関係を生み育てていることが多いと論じる。友人・知人を多く持ち、その関係を自分に有利になるように操作する者は積極的に評価されることが多く、労働はそれ自体として固有の原理を持つ独立的な領域というよりも、こうした社会関係の場の一つと見なされ活用されているという。またイタリアでは、雇用労働が本質的に抱える従属性への嫌悪ともいえる感覚が強く、自分の裁量を発揮し社会関係を操作できる働き方が評価され、それが労働における選択肢に反映されている。

パートIII「労働とジェンダーの軌跡をたどる」では、戦後日本社会における女性労働および男性労働の研究蓄積が批判的に考察されている。木本喜美子による第9章「女性たちはどこでどのように働いてきたのか」は、まず、雇用の場におけるジェンダー間格差の要因を女性の家事・育児役割に求める従来の女性労働研究の問題点を指摘し、その背後にある「男性は外で働き女性は家事・育児を担う」という前提的認識を問い直している。資本主義化が「主婦の誕生」を促したという歴史的構築性をふまえた上で、「家庭内性別分業決定論」を超え、労働過程自体のジェンダー分析を行う必要性が論じられ、日本の百貨店やスーパーマーケットの事例では、雇用慣行や職場において男性優位／女性軽視のジェンダー関係が執拗に再生産されるメカニズムが検証されている。木本は、家族内諸条件と労働の場とをいったん切断した上で、もう一度、女性にとっての雇用労働領域と家族領域をつなぐ方法を提示し、福島県の地場産業であった織物業従事者の事例を通して、異なる家族構成の中で生活する女性たちにとっての雇用労働と家庭内労働の体験を関連づけている。その先の課題として、ジェンダーと他の社会的分離との交差、格差社会のジェンダー秩序という観点からの分析、といった女性労働研究における方法的枠組みの深化も提唱されている。

第10章「戦後日本における「仕事」の意味と男性性」においてジェームス・ロバーソンは、日本男性の労働に関する研究蓄積を、時代を追って振り返り、大企業のサラリーマンを対象とした研究が主流であった時代から、しだいに社会の多様な構成員・労働者に目

が向けられ、フリーターなどにも焦点を当てた民族誌が増えたと指摘する。近年の民族誌的研究では、人々がなぜ夢や他にやりたいことを追いかけて会社を辞め、フリーターや派遣労働者として働くことを選択するのかが考察され、男性が矛盾する感情のはざまで葛藤している姿をとらえているという。ロバーソンは、近年の非正規労働・不安定労働の拡大はけっして新奇な現象ではなく、従来の研究が十分に関心を払ってこなかった中小企業のブルーカラー労働者たちに常につきまとしてきた問題が顕在化したにすぎないと指摘する。多くの人々が非正規雇用に就き社会保障は厳しい状況にあるという、現代日本におけるさまざまな形態の「不安定さ」を考える際、ロバーソンは、社会階級が突然その重要性を取り戻したのではなく、労働者階級の男性の経験や仕事の意味を形づくってきた不確実性をめぐる経済的かつ文化的な条件、すなわち構造化された多様性が広がったのであると論じる。

本書に収録されたそれぞれの論文は、長期的かつ綿密なフィールドワークのもとに構成されていて、社会背景も労働事情も大きく異なる事例を取り扱っているが、それらの分析からは、仕事それぞれの文化・社会的価値と密接に結びつき、それゆえに、経済的な報酬とは無関係に仕事の選択をしたり、頻繁に仕事を辞めたり転職したり、一時的に複数の仕事にかかわっていたりと、人々が柔軟で幅の広い働き方をしている実状が見えてくる。こうした、人々の生き方としての仕事観は、本書におさめられた5点のNoteでも、生き生きと伝えられている。「妻たちの起業」(Note 1)で阿良田麻里子は、インドネシアの料理上手な女性がケータリング業者となる知恵と戦略を描き、「北アフリカにおける女性の就労行動の変化とジェンダー役割」(Note 2)では、宮治美江子が、イスラームにもとづく身分法や家族法にもかかわらず、女性の急激な社会進出が進んだ背景と、そこで女性たちが、職業・家事・育児・宗教行事・親戚付き合いにおけるさまざまな責任を引き受けている状況を分析している。石川登による「「仕事」と「労働」」(Note 3)では、東マレーシアにおける「働く」ことに関する言葉の意味とそれを取りまく社会変化について比較検証されており、嶋田ミカによる「「物乞い」という仕事」(Note 4)では、インドネシアの「物乞い」を生業とする人々が、家族や友人と互いに助け合うコミュニティを形成し、「物乞い」を仕事として生活を成り立たせている状況が描かれている。「ワーク・ライフ・バランスを要請する北欧福祉社会の課題」(Note 5)では、鈴木七美が、北欧福祉社会における「ワーク」という言葉の意味を検証し、ボランティアであっても、収入を得て税金を納めることにつながる仕事であっても、ワークは社会のケアにかかわり皆が生きる場を育むものであるという考え方があり、社会を支える成員として生きるという価値観が反映されていると指摘している。

このように、各章やNoteの豊富な事例から、仕事・労働をめぐるさまざまな意味や規範、生活戦略や次世代形成などの実態や交渉が浮かび上がってくるが、本書最大の魅力は、全体が研究者同士の対話や議論の積み重ねにもとづく真の共同研究の成果であり、序章および各章、Noteの論点が響き合っている、という点である。中でも、いくつかの章が刺激し合い、豊かな議論に発展しているのが、性的分業をめぐる問題である。経済構造の変化や政治体制の転換、グローバルな移動などの急激な社会変化が起きている現在、夫

婦間の役割分業を核としたジェンダー規範が依然として大きな影響力を持っている一方で、実際にはさまざまな交渉や調整が重ねられ、規範を逸脱した就労行動も再解釈され、容認されている。こうした交渉の過程で、仕事の可視・不可視という状況がジェンダーに関係し、性別分業を複雑化しつつ再生産させている状況も実証されている。この問題に対し、序章で中谷と宇田川は、性別分業の規範的な根強さとそれに対する実践場面での柔軟な対応の問題とみなすだけでは不十分であるとし、性別分業は、男女というジェンダーだけにかかわるものでもなく、稼得役割／ケア役割、有償／無償、男性／女性、見える／見えないなどのさまざまな図式が、それぞれの状況や立場（夫婦、家族、周囲の社会、国家、宗教など）に応じて利用・解釈され、それらの解釈が互いに複雑に交錯・交渉し合う中で、その時々には析出されていくと論じる。ゆえに、性別分業とは、それ自体が変化しているか否かという単純な問題ではなく、その社会における仕事や労働の変化を最も端的に映し出すアリーナとして見るべきであり、そこでは、ジェンダーとともに、家族、国家、民族、宗教などの他のさまざまな秩序や要素も絡んだ交渉が不断に行われているという。

また、仕事や労働の実態を、従来の議論の枠組みはいったん棚上げして、人々の生活全般の中で具体的に問い直してみるという本書全体の目的も、各章の異なる社会状況の比較検討によって達成されている。働くことはすべての社会において欠かせない営みであるが、近年、賃金労働化、グローバル化がますます大きな影響を及ぼしている。そのような状況における人々の選択と実践を考えると、単純に有償労働と無償労働を対比させるのではなく、仕事の可視性・不可視性の交渉、不確実な自然環境や社会状況の下でリスクとともに生きている人々が、柔軟性を確保しながら自分とまわりの人たちの人生をきりひらくやり方、また現在、世界的に労働の典型とされている雇用労働の生活全体における位置づけなど、極めて異なる状況の描写を並列させることが、市場労働中心主義的な仕事観の相対化につながっている。本書は、個々の事例ごとに、まだまだ検討の余地があるだろうが、全体としての相乗効果が非常に高く、今後の労働・仕事研究における議論の土台となる論文集となっている。